

2023 年度後学期 学生による授業評価アンケート総評

2024 年 2 月

浦安キャンパス FD・SD 委員会

本総評は、令和 5(2023)年度後学期に実施した浦安キャンパスにおける「学生による授業評価アンケート実施結果」について、各学部学科及び教育センターによる集計結果分析に基づき、明らかになった課題及び今後の授業改善に向けた方策についてまとめたものである。

1. アンケート実施結果の概要

(1) 実施期間

- ・第 1 回：2023 年 10 月 9 日(月)から 10 月 21 日(土)まで
- ・第 2 回：2023 年 12 月 11 日(月)から 12 月 23 日(土)まで

(2) 実施対象

- ・第 1 回：全教員、607 科目(ただしゼミの授業科目、履修者 5 名以下の授業科目及び再履修者のみが履修する授業科目は除く。また 1 教員あたり同一名称の授業 科目が複数ある場合は、履修者最多の授業科目とする)
- ・第 2 回：全教員、615 科目(ただしゼミの授業科目、修者 5 名以下の授業科目及び 再履修者のみが履修する授業科目は除く。また 1 教員あたり同一名称の授業 科目が複数ある場合は、履修者最多の授業科目とする)

(3) 調査方法

- ・Web 入力方式(スマートフォンやパソコン等を利用して、アンケート実施期間中の任意の時間に Web ポータルシステムから回答)

(4) 評価方法

- ・5 段階評価 (5. 満足、4. やや満足、3. どちらともいえない、2. やや不満、1. 不満)

(5) 質問項目

- ・授業について 9 項目、その他(学生自身の満足度、教室の設備・環境について)

(6) 回答学生数

- ・第 1 回：延べ 7, 856 名(回答率 33. 7%)
- ・第 2 回：延べ 6, 679 名(回答率 28. 7%) (注)回答率=有効回答者数÷履修登録者数

2. 集計結果と分析

表 1・表 2 は各項目における評価の平均値を学科別に集計したものであり、これをレーダーチャートにしたのが図 1・図 2 である。

第 1 回、第 2 回ともすべての区分において質問項目の平均値が 4 点以上となっており、授業の質および自らの学修に対して高い水準の評価がなされていると言ってよい。質問項目 10 番「この授業に対するあなたの満足度をお答えください。」に対する第 2 回の平均値は「特別科目」で 4. 77、「日本語学科専門科目」「中国語学科専門科目」「経済学科専門科目」「教職科目」「多言語コミュニケーション」でいずれも 4. 6 を上回るなど、高い水準であることを示している。

図1 2023年度後学期1回目

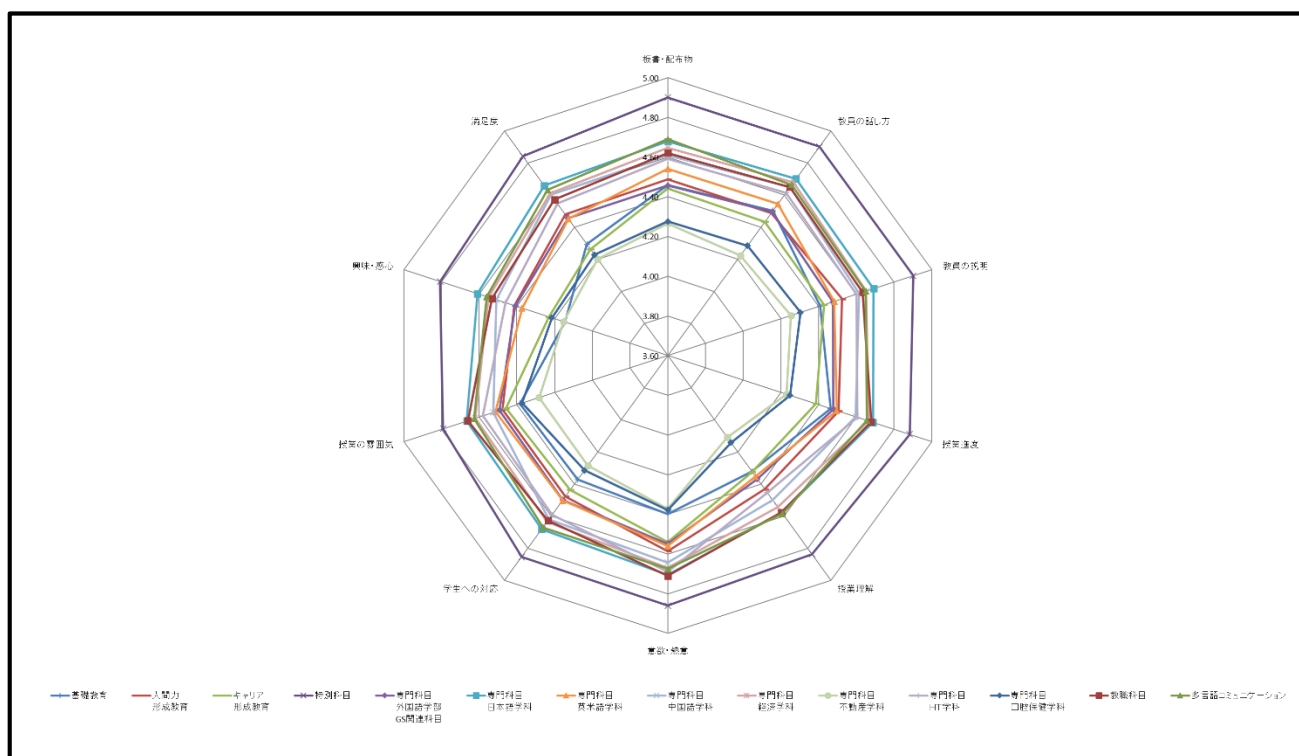
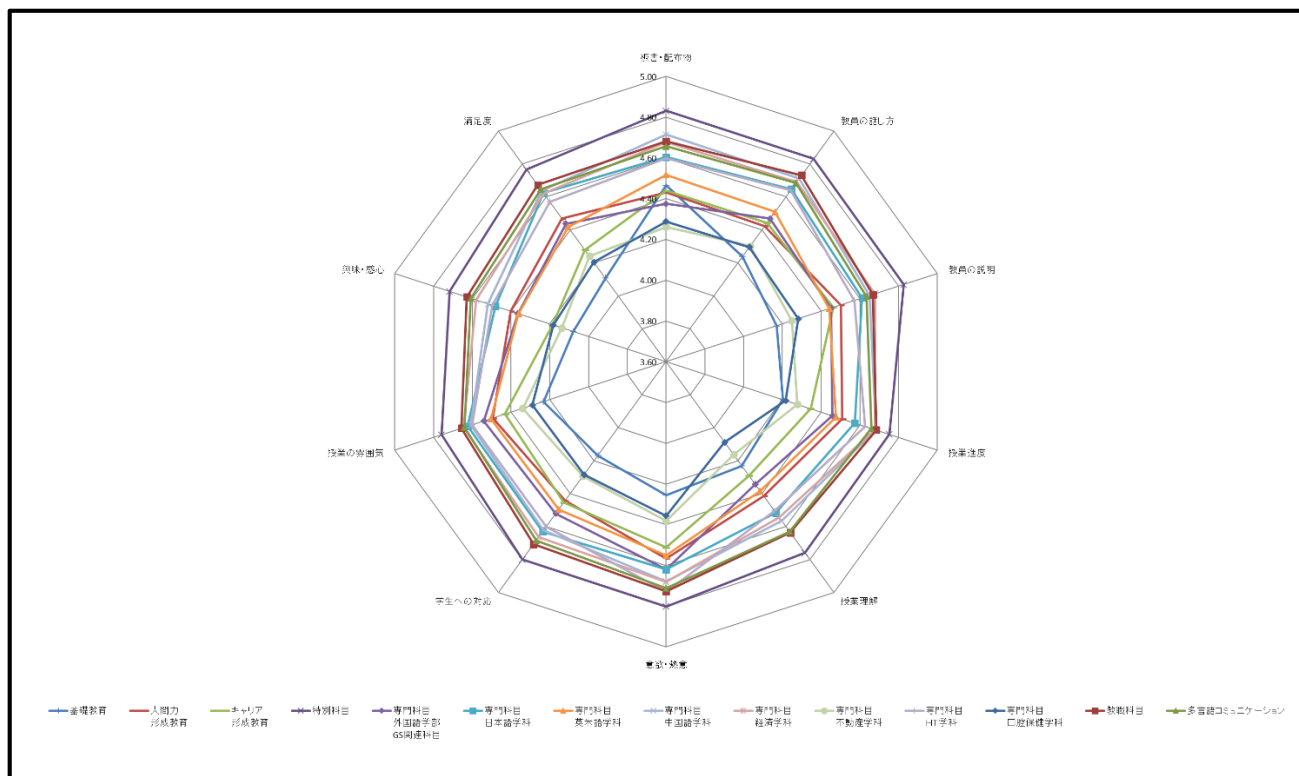


図2 2023年度後学期2回目



1回目のアンケート結果と2回目のアンケート結果は大きく異なるものではないが、同じ質問項目7の満足度について見ると、同一科目区分の中で比較した場合、ポイントの上昇が見られるのが14区分中7区分、質問項目5「授業の内容を自分なりに理解できましたか」については14区分中7区分となっているので、学期中盤から後半にかけて、多くの科目区分において理解度や満足度が上昇したことがうかがえる。

一方、質問項目3「教員の説明は分かりやすかったですか」については第1回と比べて第2回の方が上昇した科目区分が14区分中4区分に、質問項目1「配布物は読みやすかったですか」については上昇した科目区分が14区分中6区分に、それぞれとどまったことから、第1回のアンケート結果を後半の授業の改善に活かすという点で課題もあることがわかる。

表3

基礎教育	人間力形成教育	キャリア形成教育	特別科目	専門科目 外国語学部 GS関連科目	専門科目 日本語学科	専門科目 英米語学科	専門科目 中国語学科	専門科目 経済学科	専門科目 不動産学科	専門科目 HT学科	専門科目 口腔保健学科	教職科目	多言語コミュニケーション
29.0	30.0	24.9	58.5	29.3	26.1	33.3	28.0	27.9	47.3	23.1	21.5	40.8	27.4

図3 授業外学修平均時間の推移(基礎教育科目)

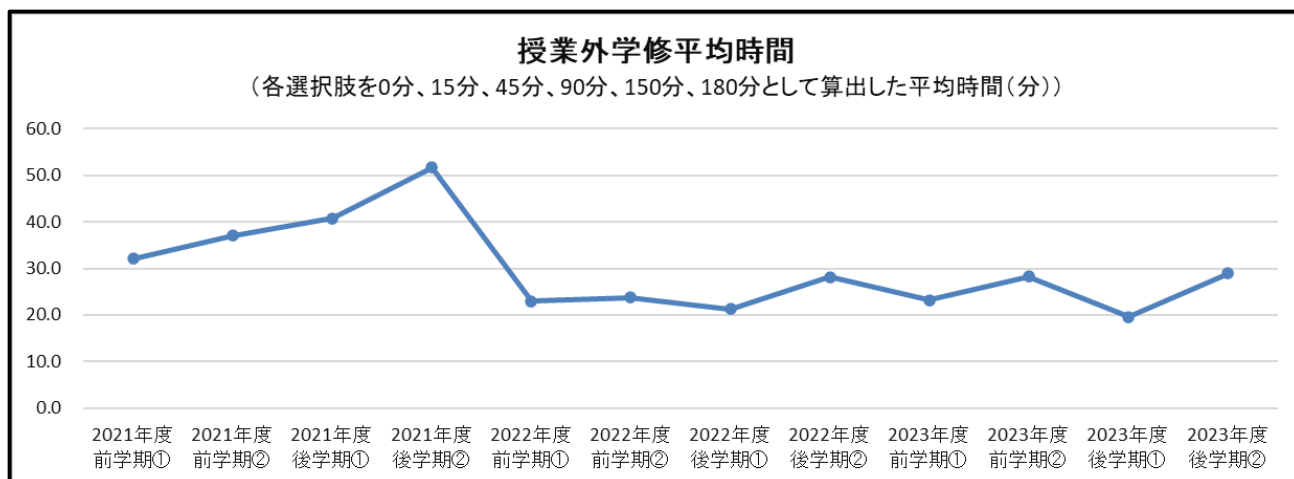


図4 授業外学修平均時間の推移(日本語学科専門科目)

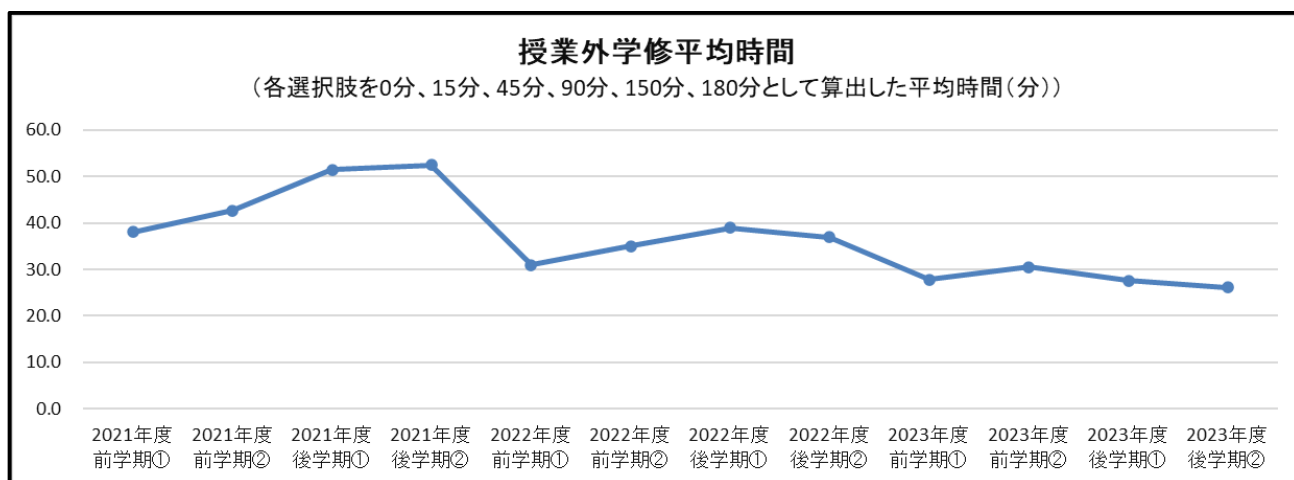


表 3 は第 2 回アンケートにおける各区分別の授業外学修平均時間である。長いものでも特別科目の 58.5 分、不動産学科専門科目の 47.3 分、教職科目の 40.8 分であり、他は総じて短く、単位の実質化に向けて課題となろう。

授業外学修平均時間の推移について、より詳細に考察する。次の図 3・図 4 はともに 2021 年度前学期から 2023 年度後学期までの授業外学修平均時間の推移を、基礎教育科目(図 3)と日本語学科の専門科目(図 4)について作成したグラフである。

図 3 の基礎教育科目については、2021 年度のコロナ禍において 32.1 分から 51.7 分と、比較的高い数値を示していたが、2023 年度後学期は 19.6 分と 29.0 分と、低くなっている。1 回目のアンケートは学修平均時間が低くなる傾向があるものの、2023 年度後学期にはついに 10 分台に落ち込んでしまっている。

図 4 の日本語学科の専門科目は、2021 年度は前学期が 38.0 分と 42.7 分、後学期が 51.5 分と 52.5 分と推移していたが、2023 年度後学期は 27.6 分、26.1 分となっている。こちらもほぼ半減している。

この推移から授業外の学修時間は、2021 年度には高かったものの、2022 年度から大幅に減少し、それが定着してしまったといえる。2021 年度はコロナ禍のため一部に遠隔授業を実施していたが、その結果として、教室外での学修習慣があった可能性がある。2022 年度以降は、対面授業となったため、事前学習と事後学修が減った可能性がある。2023 年度は 2022 年度と比較しても減少傾向にあり、授業外学修の時間を増やすように検討する必要がある。

3. アンケート結果からわかったことと課題

授業評価アンケート実施の集計結果と分析に基づいてわかったことと課題は次のとおりである。第 1 に、授業に対する評価は高い水準を示しており、授業に対する満足度や理解度は第 1 回アンケートより第 2 回アンケートの方が高い数値を示している科目区分が多いことから、授業が終わった時点で授業に対する満足感、理解できるようになったという達成感を多くの学生が持てるようになっていると考えられる。

第 2 に、1 学期に 2 回のアンケートを実施しているが、1 回目のアンケート結果が必ずしもその後の授業運営の改善につながっているとは言えない可能性がある。例えば、質問項目 3「教員の説明は分かりやすかったですか」に対する評価ポイントが、14 の科目区分の中で 4 区分でしか上昇しなかった。もちろん、授業後半になると、授業内容が複雑になり説明が詳細になるなどの要素も考慮すると、この数値だけで「授業改善がなされていない」などと断じることは出来ない。ただ、1 回目のアンケート結果を授業担当教員がどのように受け止めて、それを後半の授業にどのように活かしていくか、FD・SD 委員会を中心に、今後の課題として取り組んでいかななくてはならない。

第 3 に、授業外学修時間を増やすことである。2021 年度と比較すると、2022 年度から 2023 年度にかけて授業外学修時間が減る傾向にある。大学生は自主的かつ自律的に、能動的に学修していく必要があるため、授業外の学修時間は必要である。学修時間の確保はこれまでも検討されてきたが、減少傾向は続いており、もはや教員個人で努力するレベルを超えていよう。そのため、なぜ学生が学修しないのかを実証的に把握し、分析するべきである。具体的には、例えば、学生の生活実態調査を実施し、学生がどのような生活をしているのかを明らかにした上で、それを踏まえ全学的に対応をする必要がある。

第4に、学生の差への対応である。アンケート結果を受けて作成される教員報告によると、多くの教員が、学生間の授業態度差と基礎学力差という2つの差への対応に苦慮しているようである。遅刻や欠席、課題の提出、授業へのやる気などで示される授業態度は、学生間で大きな差がある。同様に、その科目を学ぶための基礎的な学力も、学生間で大きな差がある。教員だけでこの差に対応することは難しくなりつつあるようであり、今後は全学的な対応をする必要が生じそうである。

最後に、回答率の向上である。2023年度には、前学期と後学期にそれぞれ2回、合計4回のアンケート調査を実施したが、回答率は低下傾向であり、2021年度以降と比較しても解決に至っていない。回答率が低すぎると、調査の信頼性に懸念が生じかねない。その一方で、学生の視点からは、特に授業に不満がない場合には、アンケート調査への参加誘因が乏しいともいえる。回答率を向上させるために、アンケート調査の実施方法を根本的に検討する時期に来ているといえよう。